

「呪い」を超えて、対話の方へ

私立高校教員 平馬悠哉

教員になって11年目。今は疲れて担任を降りて学年付きの副担任をしている。1つ目、2つ目のクラスとも、生徒からの反発と不信で最後はボロボロになって終わった。3つ目の新しいクラスが始まるとき、「温かさの中にも『ダメなものはダメ』と言い聞かせることができる強い指導で生徒をコントロールしなければ」と思った。もううつすらと、「毅然と」指導することが自分には合わない」とわかつてはいたのだが、それができないようではダメな教師だと真面目に自分に思い込ませていた。

問題行動の続出

新しく始まったクラス、入学早々の1学期にいじめが起きた。男子生徒S男が電車で痴漢に遭った。Y男がそれをネタにしていじった。そのY男に、なぜ彼の被害体験をいじることができたのか、丁寧に訊いた。「中学のときのいじり合いの文化がくせになっている」と何度目かの問答で彼は言った。二度としないと決意を述べさせた。でもこの時何が悪いことなのか本人はおそらく自覚できていなかった。母親からは、入学当初にY男には発達障がいの可能性があると訴えられていた。普段の生活ではそのようなそぶりは感じられなかったため、彼の特性を

私自身軽く見ていた。後述するようにY男は二年次にも同じ生徒を、しかも更に大きな規模でいじめた。

更にこの時、周りの生徒も一向に被害者S男の立場に立ってくれなかった。Y男はカースト上位だった。だから、同じ上位同士の生徒達はY男を弁護しつづけた。「なぜ被害者S男がそれほど騒ぐのか意味が分からない」と吐き捨てる、クラスの実質的なリーダーであった学級副委員長のA子は、「自分も痴漢に遭ったことがある。そんなことでいちいち騒ぐな」と言う。被害生徒S男は、中学でのいじめられ体験を持っていた。S男は学校を辞めると訴えた。しかし、彼とつながりの深いメンバー数人と私とで話し合いの場を何度も持った。この時は彼は学校に留まることを決めた。

1年の2学期、文化祭間近の社会の授業中、前述のY男とM男とが文化祭でクラスが使うベニヤ板に30分ほどかくれんぼをして遊ぶ事件が起きた（2人は学級委員会メンバーであり、この事件のほぼ1年後、S男に再びいじめを起す当事者にもなる）。職員室で相談すると「この機会を上手く指導に使いたいよね」と言われ、一つの演出をしようということに。まず担任が「2人は文

化祭に出せない。大事な授業ではしゃぐ2人が、文化祭になったらもつとひどくなるはずだからだ」とクラスに宣言する。クラスからは「いや、出させてくれ」と声が出る。そこで緊急クラス討議を開かせる。決を取らせて担任に「二人を出させてほしい」と申し入れをさせる。担任は二人を戻すが、そこには色んな条件をつける：そういうシナリオ。結果は、概ね想定通りの流れにはなった。しかしこの時のクラス討議の場面で、先にY男に引められたS男と、彼と仲が良く、先にS男の退学を引き留めるグループにいた生徒2人だけは、「保留」に手を挙げた。

文化祭直後、後期の学級委員会選挙があつた。「かくれんぼ事件」を起こした生徒2名と、それに対してクラスで唯一当事者以外で「保留」に手を挙げた2名の生徒が競合で立候補した。前者の2人が勝った。票数は大差だった。先の指導がクラスとかみ合っていないことをここで初めて気づいた。

そのY男が、数学の宿題写しをしている現場を学年の体育の先生が押さえた。Y男は「数学の宿題のことをなぜ体育の先生であるあなたに指摘されなければならない

のか」と抗弁したと報告を受けた。彼の言を詭弁だと決めつけた私は、これをクラス全体の前で報告し、「恥」⁽¹⁾をかかせてやろう、そして担任はY男の首根っこをつかんでいるとクラスに思わせて、「秩序」を安定させよう。それが、S男やS男を支える子たちの安心につながるはずだから、という指導方針を持った。クラス全体の前で、私は事柄を面白おかしく報告し、Y男に皮肉っぽい話の方で釘を刺した。クラスは笑った。HR中は僕は僕をずつとにらんでいた。HR後、「自分の言っていることがなぜだめなのか、納得いかない」と言ってきた。彼は本気で怒っていた。クラスで「恥」(公恥)をかかされ笑いものにされたことに対する侮辱も感じているようにも見えた。ああこれはまずかったなと内心思ったが、「こっちは正しいことを言っていて、その正しさを受け止められない君にこそ課題がある」と言って憚らなかつた。

二度目のいじめ事件

2年になり、2度目のいじめが発覚した。件のY男とM男、更に彼らと仲の良かったもう一人の男子生徒の3人が主たる行為をしていた。そして、クラスの多くの男子生徒が嘲笑に加わっていた。被害生徒S男は今度こそ

学校を辞めると言う。何度も説得したが、学校と担任への信頼はすでに皆無だった。それに彼は、クラス全体から自分は蔑まれていると感じていた。事実、クラスの核であるはずの学級委員のメンバーは加害者に近く、被害者S男を護ろうと思う人は学級委員長ただ一人(1年次のS男の退学を止めたメンバーの一人)だった。

ちょうどその時期は、学校全体でもいじめが頻出していった。そして多くのケースで、「被害者が学校を辞めて、加害者が残る」という状況が生まれていた。このままでは自分のクラスも同じようになると思い詰めて「被害者が辞めるならば、加害者も辞めさせなければならぬ」と考え、結果そうさせた。

このことも辛かったが、なにより辛かったのが、クラスの生徒達からも辛い言葉が投げられたことだ。先に挙げた学級委員会がその急先鋒だった。彼らに数度、放課後に呼び出された。長時間話をしたが、本当のこと―被害者が辞めるから、加害者も応報的に辞めさせた―は、最後まで言えなかつた。事が一旦落ち着き、HRで作文を書いてもらったときに、副委員長のA子は次のような文章を書いてきた。

…先生の話聞いていても、納得する回答がないし、「被害者のS男君の気持ちを考えて、どのようにクラスに戻ってきてもらうかを考えることが大事」とか、「新たにクラスをつくっていいこう」とか言われても、S

男君自身の明確な気持ち・考えが分からなければ、自分たちはなにもできないと思います。先生自身、「3人には辞めないで、全員で卒業したかった」と仰っていましたが、担任として、3人にどんな言葉をかけたのか気になりました。学校側の主張はともよくわかりましたが、先生の思い・考えがよくわからないし、通信も回収されてしまったので、読み取ることもできません。

3人がやってしまったことはともいけないことは分かります。でも大切な3人の仲間を急に失って、何も言わないようないい子ちゃんではありません。…自分たちはまだ高校生です。ひどいことを言うかもしれないませんが、自分は高校選びをもっとしつかりやればよかったと後悔しています。…みんなと平等になんて仲良くできません。3人（S男と、S男を護ろうとした生徒2人のこと…筆者注）と話しているとくやしい。精神的にもう無理と言っている人もいました。何を言いたいのかと言うと、今回の学校の対応、担任としての対応

すべて正しかったのか、とても疑問に思いました。文章がぐちゃぐちゃですみません。

無力感でいっぱいだった。もうこの辺りになると教師を辞めたくなっていた。

転機

3年になった。学級委員会の一人であるK男との間で（自分としては）ある決定的な事件が起きた。K男は、3年に進級してすぐの春休み課題を出してこなかった。

「ならば明日出しなさい」と指示。しかし彼は翌日も出さなかった。K男はこれまでこうしたことを繰り返していたこともあり、かなり強く叱責した。彼は「先生は『明日』とは言わなかった」と言い、結局言った言わないの言い合いに。そして「先生は不利益があったら声を挙げなさいと言っているのに、挙げるの全然きいてくれないじゃないか。それなのに先生は生徒に命令する権利があるのか、生徒は絶対に従わなければならないのか」と彼に問われ、私は「そうだ」と反射的に答えた。でも、K男の言うことはもっともだとその時思っていた。自分の中で整合性がついていないところを、しつかり突かれた。でもそれは彼には言えなかった。一連のやりとりを聞いて

ていた主任に「僕だったらそんな言い方はしないな」と一言だけ言われた。敗北感と屈辱感でいっぱいだった。

このことを、知り合いの小学校の先生に相談したら「あやまればいいんだよ」とけろつと言われた。それは当時の自分にはかなり抵抗があった。でも3年の夏休み直前、通知表を渡す時にK男にあやまった。僕の指示が確かにあいまいだった。申し訳なかったと。するとK男は驚いた後、ニヤツと笑って「へえ：先生ってそういうこと言う人だったんだ」と言った。悪い感じではなかった。むしろ初めて彼と人として会話ができた気がした。この出来事の後、彼とはよく話すようになった。その中で、こちらが本心を言うと、彼はきちんと応答してくれる人だということに気づいていった。

『プリズンサークル』との出会い

このK男とのやりとりを経て、これまでのやりかたとは違う実践を追求したいと今まで以上に強く思い始めた。そのような折、高生研で「プリズンサークル」を視聴した⁽²⁾。衝撃だった。とりわけ、作品中「修復的司法」の観点から対話的实践を試みている部分があった。「これだ」と思った。それ以降、修復的司法（修復的対話）関連の

書籍を読み漁った。今は関連する団体にも所属して、修復的対話の理論と実践の勉強をしている。

修復的対話においては、加害者は自身の行為によってもたらされた被害者やコミュニティメンバーの苦しみや悲しみを、直接あるいは間接に聞く中で、その行為に対する（公恥としての）「恥」の意識を喚起し、やがて自身が犯した行為によって生じた損害をどうように修復できるのか、責任を負うことができるのかを模索するプロセスに入ることが期待されている。そして被害者にとっては、犯罪によって損なわれた関係の修復プログラムに様々な形で参画しニーズを表出することを通じて、被害感情に癒しがもたらされることが同時的に目指されている。この修復的対話は、自分のクラスで起きた様々な事件に対する対話的な解決方法を教えてくれるような気がした。少なくとも、私がY男にやった「恥付け」はまったく間違っていることがわかった。そして、もしあのいじめ事件の時に、関係者が集い、彼のニーズを聞き合い、損なわれた関係を修復していくための対話がなされていけば、S男も退学を考え直すことがあったかもしれない。

対話の方へ

彼らが卒業していった、副担任になった今年度、15人ほどしかない文学を読み合う高2の選択授業を持っている。学力が最も低い子達が単位あわせのために取る授業でもある。生徒たちは、休み時間のたびに学校批判を繰り返して、そして授業中は居眠りや私語を止めことはない。中には学習障がい傾向のある子も幾人かいる。彼らの発想はすごく面白くて、毎回の授業はとても楽しみなのだが、先日、とうとう授業を止めてしまった。さあ止めちゃったけどどうしようと思いつつ、これまでの「毅然とした」指導はもううんざりだったので、そうではない形で彼らと関係をつくりたいと思い、思い切って「会議サークル」の提案をした⁽³⁾。会議サークルは、椅子を円に並べて、一人ひとりがお題に沿って語り、メンバーはそれを聞き合うという形態をとる。そこには以下のようなルールがある。

- ①人が問題なのではない。問題が問題なのだ。
- ②人が話している時は話さないでほしい。
- ③会話は円をまわって一人ずつ行っていく。自分の番をパスする権利はあるが、望ましくはない。
- ④この場で話したことは、この場に留めておくことを約束してほしい。
- ⑤円

という形は、誰もが話す権利を持っているということとを意味していることを理解してほしい。

話すときは「トーキングピース」を順番に回して話しをする(この時はカメレオンのかわいい絵が描かれた石)。最初は私も緊張していて、足も震えていた。まずは軽めのお題、「自分をいつも笑わせてくれる人は誰?」、「今はまっているゲームや漫画や小説や音楽は何?」で一週ずつまわし、場をほぐす。生徒達は思いのほか話をしてくれた。

本題に入る際に、「『誰かが悪い』というのではなく、教室の中にある『問題』は何で、その『問題』に一人一人がどのように『影響』を受けているか、それを出し合おう。人が問題なのではなくて、問題が問題なんだ」とも一度念を押し、「この授業で起きている問題は何ですか?そしてあなたはその問題にどのような影響をうけていますか?」というお題を出した。

「寝ている人が多いと、自分も寝て良いのかと思って、授業を受けなくなっちゃう」「先生が話しているときにも私語をしているのが気になる。本当は、もっと集中して学習をしたいと思っているんだけど…」

「問いを考える時間が長いし、先生が一人ひとりに考

えを聞き過ぎて、似ている答えが出て眠くなる。」「頑張って生活リズムをつけようとしているのだけれど、どうしても眠ってしまつて自分も悩んでいます」「自分が私語をしてしまつて、自分が悪いのは自分と分かっているのですが…。気をつけたいと思う」

修復的対話では誰もが平等に発言する権利を持っている（そしてパスする権利を持っている）ので、私も自分がいかに毎回の授業を楽しみにしているかということ、その分準備も時間をかけてしてきていること、だからみんなの行為や態度によっていかに哀しい気持ちになつたかを率直に一人称で伝え、「君たちの中には『先生はきちん」と怒つたほうがいい』って書いてくれる人もいたけど、僕は昔から親とか剣道の先生に怒られ続けて、そのせいで未だにトラウマがあつて、でも担任やつているときに毅然と怒らなくちゃいけないから頑張つて怒っていたら、自分自身の気持ちも暴走して自分の事が大っ嫌いになつちやつた。だからもう怒るのはしたくないって思っているんだ。だから君たちと語るの中から始めたいと思つて、こういう場をもたしてもらつたんだ」と語つてみた。生徒は真剣に聴いてくれていた。

次いで、「この問題を解決するために、あなたが個人でできることにはどのようなものがありますか？」「そして先生に援助してほしいことはどのようなことですか？」という問いでもう一周した。

「夜遅くまで起きないように、管理を頑張る」「前やつたような班学習に戻してほしい。まとめたり議論したり、役割を決め合う中で眠さや私語がなくなると思う。」「イロイロノートを活用することで、班活動と一人ひとりの意見を全て観るといふのを可能にさせたい」「私語や居眠りは声を掛け合う」「前やつたような、『大きなシート』に班の意見を書き込む作業もしていききたい」

全部で70分ほど語り合った。生徒は飽きることなく、最後まできちんと対話をしてくれた。最後に、「今日はありがとう。人間だから、今後崩れちゃうこともあると思うけど、それはそれだからその時はまた話し合おうね」と言うと、生徒はちよつとほつとしている様子だった。今もまだ私語や居眠りはあるが、前よりはだいぶ落ち着いたように感じる。ある女子生徒は、「サークル会議をやる前は私語が続いていたりして先生の話を訊かない人

が居たり、居眠りをする人が多すぎてもう授業がするの
がいやになっていたけど、サークル会議で言いたいこと
が言えてよかった」と感想を言ってくれた。よく私語を
する二人は、学年からは、札付きの子たちだと見なされ
て、厳しくまなざされたりよく指導を受けている。その
内の一人の生徒は、これらのことをきっかけに、たとえ
ば自分の体調のこと(来たくても来られないことが多い、
でも先生には怠けと思われて信じてもらえない、頑張っ
て学校に来て小中から今まで褒められたことがない)
などをよく話してきてくれたりもするようにもなった。

もう一つ、こんなこともあった。先日の高校1年生の
古典の授業でのこと。授業開始前に生徒とおしゃべりし
ていた時、「があん」と大きな音がした。すわ何事かとみ
ると教室の扉が外れている。何人かの男子生徒が悪ノリ
をして扉を外してしまったのは明らかかな様子。とっさに
このまま全体で聞き取りを試みようと思ひ立った。

私「誰が外したの？」 生徒「俺です」 私「W
君かあ。あのさ、外しちゃったときどういう状況
だったの？」 生徒「えっと…」

彼が発言した言葉をおもむろ黒板に書き出すと、その
瞬間クラスの子たちは「何が始まるんだ」とざわつきな
がらもちよっと笑った。その笑いは嫌な感じではなかつ
た。その雰囲気に背中を押され、更に「この時誰がいた
の？」「君はなにをしていたの？」と事実関係を重ねて聞
き、書き出していった。私が一番最初に疑いを向けてし
まったT君に「君は何をしたの？」と訊くと、「俺は何が
あったか心配で駆け付けたんすよ！誤解すすよ！」と言
ったので、ごめんごめんと言いながら「T君、正義感で
駆け付ける」と書くと、教室がどっと沸いた。ドアを外
した二人に、「どうしてやったの？」と訊くと「わるふざ
けというか、いじわるしてやろうと思って…」と応答。
次いで、「この状況を解決するために何をすればいい？」
と全体に訊く。当事者の子たちは「自力で直します」と
言う。僕は、「自力で直らなかつたら？」と訊いてみる。
当該の子は詰まったので、委員長に訊くと「担任に相談
します」と応答。

すべてのやりとりを終えたとき、生徒から拍手が上が
った。当該の子たちはちよっと恥ずかしそうにしている。
この日の授業は、生徒たちはいつも以上に楽しそうに、
集中してやってくれた。

(ひらま ゆうや)

注

(1) これは修復的対話で言うところの、「再統合的恥付け論」としての「私恥」とは正反対の「公恥」というべき「恥」かせである（竹原幸太『教育と修復的正義』―学校における修復的実践、2018年、成文堂、第8章）。

(2) この後、高生研の皆さんと座談会で学びを交流することができたのも大変ありがたかった（『高校生活指導』第213号）。

(3) ジョン・ウェンズレイド、マイケル・ウィリアムズ（綾城初穂訳）『いじめ・暴力に向き合う学校づくり―対立を修復し、学びに変えるナラティブ・アプローチ』、2016年、新曜社。

（なお本稿は2023年3月1日発刊「高校生活指導」215号の特集①「生徒達が語り出すとき―ナラティブアプローチ」に掲載された文章を、許可の上掲載しています。）